

特集 「愛着を培う飼育体験に欠かせない動物ふれあい授業のあり方」

— 総合的な学習の時間に位置付けられた学年飼育として —

中川 美穂子

最初に、飼育を学年で担当している子どもたちの作文を紹介したい。

- ・「昨日まで、元気そうだったのに、いきなりたおれてしまった。お別れ会をしている時、横になっている（ヤギの）バナラに花を供えてあげた。とても大きくて、いいにおいのする花を選んだ。じっと動かないバナラを見てとても悲しくなった。目は、ずっと開けたままだった。さわってみたら、まるで冷蔵庫に入ったみたいに冷たかった。もっと悲しくなった。」
- ・「『シルフィーがんばれ』と応援したけど、（チャボの）シルフィーは息も少ししかしていなくて、今にも死にそうでした。でもぼくたちは、ただいのるしか出来なくてほかに何も出来なくて、とても悲しくて、きんちょうして、しかも歯がゆかったです。そして、夫のイエローを連れて来てもあまりこう果がなくて、ようやくじゅう医の先生が来て、お水を飲ませたり、砂とう水を飲ませたりしました。結局、じゅう医の先生が動物病院に連れて帰りました。その日は『シルフィーは大丈夫かな』と、考えていてなかなかねむれませんでした。

これらは、中川が7年間関わってきた東京都の学校動物飼育作文コンクールで表彰された中の、総合的な学習に位置付けられた飼育体験をしている4年生の作文抜粋である。

筆者は、これらの作文の分析から、総合的な学習に位置付けられて①教育目標、②教師の指導、③獣医師への相談、④子どもと動物との豊かなふれあいの確保、などの条件がある「動物飼育体験」を与えられている子どもたちの作文は、字数が多く、内容構成も良く感情豊かな文章を書くなど、12の観点で、教育的指導が乏しい委員会活動

の子どもたちの作文より有意に高く評価されたことを確認した。これは、子どもが動物を気にするゆえに、多くの言葉で表現したいとの情熱が表現されたものと思われた*1。

1 動物飼育が児童に影響を与える理由

日置は、「心情をともなう丁寧な動物飼育を行うことで、①実感を形作ることができる。②心的視点移動（心情を形作る）。③動物を介在した三項関係・コミュニケーション訓練。④認知的能力を養う（大事な動物をよく観察する）。などの教育への可能性がある」と述べ、子どもたちは「大切な動物を守るとの『切実な思い』で必死に問題解決していく」とし、「これらは、子どもがその特定の動物を可愛いと思い、大事な存在と認識することが基本である」と述べている*2。また豊かな言葉を培うためには、抽象的間接体験の理解を十分に得るための基盤となる直接体験が豊かであるべきだと述べた*3。

愛着を持てる動物飼育にと、30年以上園・学校の飼育活動を支援してきた筆者は、以前から、心情を伴う丁寧な『園学校での動物飼育のあり方』を提言しており、動物飼育活動の年齢に合わせた飼育活動の与え方と目標について「子どもの幼児から高校生まで」の年齢にあわせた年間の活動教育計画も提示している*4が、以下に簡単な要点と「動物ふれあい授業」について述べる。

2 成長への「飼育の影響」の流れ

図1のように、子どもがその動物に愛着をもって初めて、様々な影響があらわれ、感情の醸成、文章を書く力の育成、あるいは将来の子育てまでつながる可能性が出てくるが、その「愛着」を培うためには最初の飼育導入ガイダンス「動物ふれあい教室」で、動物の体と心を気遣わせながら「心地よい接触」を体験させることが重要である。

また、前掲の作文のように、動物を気にして、掃除の辛さが動物を守る喜びになり、作業を工夫し、ともに活動を楽しむようになる時期は、1学期からの「世話とふれあい」を半年間継続した2学期（10月）ごろである。3学期には、大事な動物たちの世

話を下級生に引き継ぐため、それまで体験してきた活動をまとめて注意点や大事なことを伝える「振り返りの引き継ぎ集会」を行うことが重要。学習指導要領解説書生活科編には、「2年間の目当てを持って継続飼育を行う」とあるが、図1に示すように、

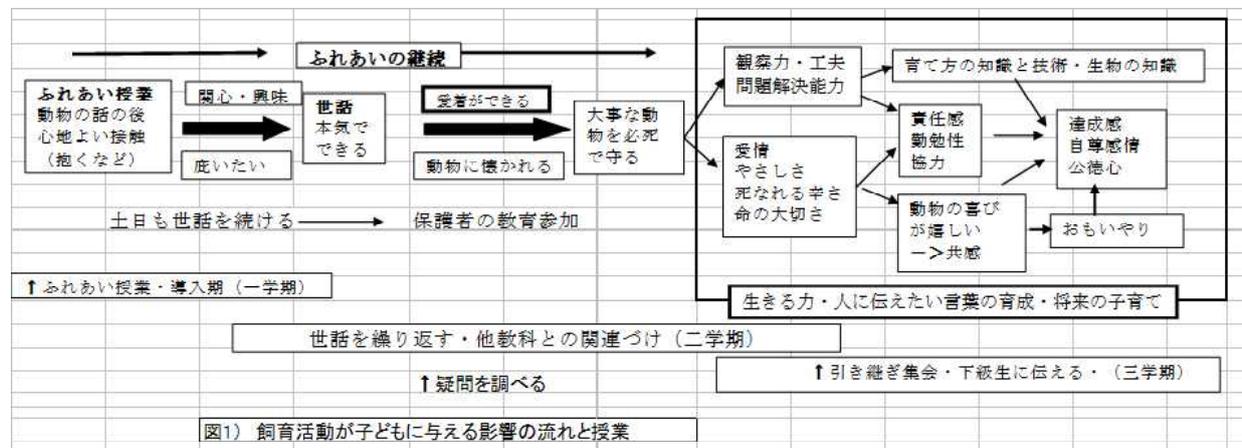


図1) 飼育活動が子どもに与える影響の流れと授業

教育体験としての飼育活動には最低一年間必要だろう。

3 教科に位置づけた飼育活動の内容

好奇心・体力から3～4学年に最適。

○年間計画（表1より）

- 1学期：飼育導入「動物ふれあい授業」飼育活動開始、休日は親子当番
- 2学期：飼育活動の疑問点や問題解決、疑問と解決法の発表、作文に活用、理科の授業に活用他、夏の対策、冬の対策など工夫し活動
- 3学期：下級生への引き継ぎ集会と伝授。集会後1カ月間、共に活動して伝授

4 「動物ふれあい授業」のあり方際

（詳細は「動物飼育と教育13号」参照）

これは単発的な体験ではなく、生命の尊さを実感させるための教育の導入部として行われ、児童自らが継続的な飼育を行うきっかけとする。筆者は45分授業を表2の授業案に従って行っている。前半は、動物の気持ちを洞察しながら健康を気遣う要点を伝え、後半には、保護者の支援で子どもに、動物の感触を楽しむように誘っている。重要なことは学校の動物を対象に行うことで、この接触で培われた関心や親しみが、

授業後も続き、やがて愛着が構築され、良い影響につながるように意図することである。

なお、動物ふれあい授業前半の逸話を通して、学校動物飼育の目的を、児童と同席する教師や保護者などみんなで、この飼育活動の教育的な意義を確認し共有して欲しいと願っている。実施時、心音の音を聞いた子どもたちと教員、保護者まで「人と同じ」と感想の言葉を述べる。また後半に動物を抱いて、特にチャボの羽の下に手をいれると、皆一様に「温か〜い！」と顔をほころばせる。

学校は主に言葉で教育がなされる場だが、この授業は肌で動物の温かさや動きを感じ、その目を見つめて動物が怖がっているか安心してに気遣う授業、すなわち「感じる授業」になる。この授業で培われた関心があるから、図1に示したとおり子どもたちは一生懸命掃除や世話をして、やがてその動物が大事な存在になると言える。その結果、様々な教育的効果が表れるが、飼育導入のための「動物ふれあい授業」はその重要な最初のステップである。毎年、飼育担当学年で行うべきだろう。

(表1) 飼育体験活用「命の教育」年間教育計画

総合的な学習における「飼育」の指導

西東京市立保谷第二小学校

1、単元名 飼育を通して (第4学年)

2、単元の目標

- ・動物の飼育体験を継続して実施することにより、生命尊重の心を育てる。
- ・動物に対する興味関心を高め、飼育の過程で生じるさまざまな課題に創造的に取り組める資質を育てる。

3、評価規準

学習活動への 関心・意欲・態度	総合的な思考・判断	学習活動に関わる 表現	知識を応用し 総合する能力
○動物の飼育に興味を持ち、自分から進んで世話をしようとする。 ○思いやりのある態度で動物に接したり交流しようとする。 ○友達や3年生に飼育の仕方や様子を伝えようとする。	○毎日の世話は苦勞も多いが、その地道な活動が命をつないでいることを考えることができる。 ○生き物と人間の関係について調べたことを基に、相互のかかわりについて考えることができる。	○体験したことをさまざまな方法で、ほかの人に伝えるためまとめることができる。 ○引継ぎ集会の計画・実行にあたり自分なりに伝え方を工夫することができる。	○動物の世話の仕方には、それぞれ理由があり、そのときの状態に応じた接し方に気づくことができる。 ○生き物の特徴や、人との違いに気づくことができる。

4、年間指導計画 (36時間扱い) ○の中は、時数。

- ・4月・・・初めての飼育活動開始。仕事の手順、当番のローテーション、休日飼育等の確認。④
保護者会での説明。(生命尊重、使命感、心の成長、親子飼育ボランティアの説明。)
 - ・5月・・・次の学級への引継ぎ集会。②
飼育導入オリエンテーション・(動物の説明と抱っこ体験・獣医師との連携) ②
 - ・6月・・・飼育新聞作り1。ニュース仕立てにした発表会。④
 - ・7月・・・夏の間の飼育方法の確認、当番の分担。夏の飼育活動。②
 - ・9月・・・「動物教室でさらに関心を高めよう」(子どもからの質問・獣医師との関連) ②
 - ・10月・・・飼育新聞作り2。④
 - ・11月・・・動物の気持ちを感じて学芸会に取り組みよう。④
 - ・12月・・・冬の間の飼育方法の確認、当番の分担。冬の飼育活動。②
 - ・1月・・・引継ぎ集会の持ち方。プログラム、資料作り。④
 - ・2月・・・3年生への引継ぎ集会。(可能なら獣医師立ち会い) ②
 - ・3月・・・3年生飼育見習い期間。(3年生と共に飼育をする期間) ③
- *休日も含めて毎日の常時活動を当番制で実施する。

5、他教科との関連

- ・国語・・・体験したことから文章は溢れるように出る。飼育新聞作り二回を通して表現させる。また、作文教材と関連させた指導が効果的である。学習発表会「ぞう列車よ走れ」等の台本作り、演技の取り組みでは、飼育体験の感想をセリフにしたり、飼育動物と登場する動物との違いや共通点を考えながら演技を考える指導。
- ・理科・・・季節による動植物の変化の単元の、生命の連続性と関連させる指導。また獣医師の支援を得て子どものもつ疑問を掘り下げ、新たな疑問・事象のつながりに興味を持てる指導。
- ・体育(保健)・・・「育ちゆくわたし」の単元で体の成長や、第二次性徴と関連させる指導。
- ・図工・・・愛情をもってかかわっている動物に対して、興味を持って観察するため大きな表現力を発揮することが見られる。
- ・道徳・・・弱いものを支配しようとする潜在的な心情や独占欲に気づき、初めて相手の立場を思いやる心が育つ。「○○してあげる」から「○○してほしいのかな」という同等の立場まで深まっていくことで対等の関係ができる。ここまで意識が高まる「飼育」は、道徳的価値の高い体験活動といえる。

(1)前半の講話・動物の心と感情について
食住の話を通じて、動物にも感情があり、小さなからだを思いやる必要があることを感じてもらう。その後の動物との交流で、学校の動物に愛着が培えるようにする。

①子どもたちへの言葉(中川の場合)

ア はじめに：皆さんは、将来どういう人になりたいのでしょうか。勉強が出来る人？優しい人？人に頼られる人？

私は、小さい時には、ね。お金持ちになりたいと思ってました。(え～？という子どもに)お金持ちになったら、困っている人も助けられるでしょう？

お金は働いてもらうものだけどもしも、私が、「この人のお金取っちゃおうかな」

と思った時に、その盗られた人が「どうしようご飯が買えない。辛いな。悔しいな。」と悲しがるとわかったら、私は盗れると思いますか？(盗れな～い、という子どもに)相手の気持ちがわかったら、盗れないよね。つまり、小学生は、「相手の気持ちがわかる、優しく正しい人になる」が大事。動物は言葉をしゃべれないね。みんなが良く動物の事をみて、その動物の気持ちを考えられるようになったら、お友達の気持ちも良くわかるようになりますよ。

また可愛い動物に死なれた時はとても悲しくて、命の大事さがわかります。

イ 毎日のすみか

本来、ウサギは野原で暮らしています。

表2 <動物ふれあい授業・次第>

実施校 小学校 学年 クラス (名) 担任(教諭)
 平成 年 月 日 () 5時間目 午後1時 分から45分授業 (準備は30分前から)
 獣医師集合 時 分 校長室

テーマ「 」

会場:() (体育館は注意散漫になるので避けたい)
 児童 : 名 (介助の都合上 動物の数により, 班に分ける)1班10~13名
 担任の先生 : ()名
 保護者: 名(一班1~2名) (20分前に集まって頂き, 事前に抱き方など獣医師と一緒に体験)
 参加動物: 学校・園の動物(ウサギ 羽, チャボ() 羽
 不足分他学校や獣医師等から借り入れる(チャボ 羽 うさぎ 羽)
 獣医師 : 名 支援 : (保護者以外がある場合))
 ★子ども達に, 授業前から, 「動物が怖がっているから静かにしてあげよう」と繰り返し注意

時間	内容	備考
導入 1分	(担当の先生)が授業, 獣医師を紹介	最初から班に分けて手を洗っておく(※)
動物の話 8分	(獣医師)チャボ, ウサギとの仲良くなる方法 動物の心と体への気遣いの話	pc プロジェクター
動物の体 5分	(獣医師)抱き方指導 潰さないように, 優しくすると暴れない. 心音を人と動物と比較	大人, 子ども, 動物と順に心音を比較 拡大心音計使用 (心拍数計算など)
ふれあいタイム 20分	班にわかれ, 子どもに動物を抱かせる. 各班に保護者が補佐. 各班にタオルと動物一匹ずつ渡す (動物抱っこ体験は, 動物の体を気遣う)	正座した膝にバスタオル2重に折って膝に置いて, その上に動物を抱かせる. バスタオル1班あたり1~2枚 ★動物の交換はしない
質問タイム	(先生が質問者を指名)	回答, 獣医師
まとめタイム 挨拶	(先生)	(獣医師) みんなが命を握っている!

事後・思ったこと, 気になることを文章にする. 獣医師に手紙など.

準備: プロジェクター・スクリーン ワイヤレスマイク 電源コード (3ヶ口)

長机2ヶ (心音拡大計と動物) バスタオル1班2枚 (児童の腿を保護)

新聞紙, ゴミ袋, ティッシュ (お子さんもポケットティッシュ・糞対策)

学校の動物 (20分前にはケージ又はダンボール等に置いて, 会場で保護者の実習)

野原では, いつでも食べ物はあるし, 綺麗なところで寝ることができます.

でも, 学校にいるウサギは, 一年365日, 飼育小屋などの同じところで, 目を覚まして, 排尿・排便して, 物を食べて, 寝ます. あなただったら, 辛いでしょ? 犬や猫に襲われるから, 外に逃がすことはで

きないけれど, 皆のためにここで暮らしている動物が, 汚れが少ないところで暮らせるように, 毎日お掃除をしてあげて下さい
ウ 食べる

人は一日3回食べている. 動物だって, 一日1回は辛いかもしれないし, 土日は食べなくてよいということは決してありませ

ん。命には休みがないので、家の人に一緒に来てもらって、学校が休みの日にも動物がえさを食べられるようにしてください。

人と同じで、朝は動物もお腹が空いています。学校にきたら、ちょっと飼育小屋を覗いて、水が無かったら入れてください。餌が無かったら入れてあげてください。家から野菜を持ってきたら動物も喜びます。チャボは、野菜が大きいと食べられないから、細く刻んで持ってきてください。学校の動物たちがどんな餌が好きなのか、いろいろあげて試してね。(生の芋や豆、アボガド、またネギのようなのはダメ)

エ 体

もしもあなたがウサギだったら、ウサギに触ろうとする同級生はどんな大きさに見えますか。ウサギから見た人間は、とても巨大でしょうね。だから怖がらせないように工夫して、そっと近づきましょう。追いかけたら怖くて逃げるので、じっとして、好きな草を差し出してだんだん仲良くなりましょう。また、乱暴にすると、呼吸ができなかったり、骨折するから、食パンがつぶれない程度の力で、優しく座った膝の上で、両手に包み込んであげてください。

オ 動物の気持ちを想像しよう

動物は、みんなを見上げて、とても大きいと怖がっていますよ。だから、しゃがんで「怖がらないで」って優しくしてあげましょう。動物は言葉を言えません。動物が、今どうしたいのか、何か困っていないかを動物の顔を良く見て考えてあげてください。そのうち、動物の気持ちがわかるようになりますよ。

2) 後半・抱く体験の実習

学校担当獣医師が、担任の指示により図3に従って、写真のごとく支援を行う。この授業で重要なことは、子どもたちを10人内外の班にして、1班に動物一頭と保護者を2名付けることである。学校が、この授業が学校が命の教育のための体験学習の一環であると認識してよびかければ、保護者は参加する。「少なくともクラスの役員の方参加を。また、ご興味のある方はどうぞ」と案内することで、問題は生じていない。

保護者の参加を得て、普通獣医師数名で、100名以上の児童に対応している。

①留意点：人がゆったりと優しい気分で動物を抱くことができれば、人の筋肉は柔らかく緊張を表さないため動物も怖がることは無く、お互い気持の良い体験になり、子どもたちの以後の関心を維持することができる。そのため、獣医師が事前に保護者に安心感を与えるように、落ち着いて動物を抱く体験を指導する。

なお、チャボとモルモットは、優しく扱えば小さい子にとっても安心な種類であるが、気の強い、また普段から人を怖がっているウサギは噛むことがあるので、相当の処置をしながら抱かせるべきだろう。獣医師の支援の得ずに試みた小学校で、暴れるウサギを落下させて脊椎骨折を起こす事例も多い。

②児童の質問から

動物を抱く前は、「ウサギの目はどうして赤い？(黒い目のウサギを見ながらでも)」「ウサギは何が好き、ニンジンでしょ？(ニンジンでも葉っぱが好きなのに。また嫌いなウサギもいるのだけれど)」など観念的な質問が多く見られるが、実際に抱いた後は、「ウサギが鼻をびくびくするのはなぜ？」

「チャボの羽の下はなぜ温かい？」「ウサギとチャボの心臓の音はなぜ人より早いのか？」「雄鶏はどうして大きな声で鳴くの？」「雄鶏の頭の赤いのは何？」「どんな草が好き？」など、具体的な質問が出てくる。これは心地よい接触で関心と興味が湧いたため、良く観察をした結果だと考えられ、この実体験が、生物学的な探究心や、「動物を怖がらせないためには、どうして抱いたら良いか」など、思いやりの気持ちや、自身の体の使い方(動物に対する力のかけ具合)にも通じていくことが期待できる。

5 教師の感想

動物ふれあい授業は、毎年繰り返される授業の一環だが、初めて単発授業を体験した学校の感想と、教員研修で4年生にモデル授業をした時の感想を掲載する。

(1)生活科単発授業実施校での感想

- ・チャボを直接抱いたときに、「温かかった！」と驚いている児童が多かったです。ほとんどの児童がチャボを抱くことが初めての体験であり、動物が活着していることを実感することができました。
- ・ウサギやチャボを抱く前は怖がっていた児童もいました。しかし、直接触れ合う体験を通して、「もっと抱きたい。」「仲良くなりたい。」などの発言が出て、児童は次第に動物に愛着をもつようになりました。
- ・「動物ふれあい教室」をきっかけにして、教室で飼育しているハムスターに関心をもつ児童が増えました。また、これまで以上に、児童はハムスターの気持ちを考えるようになり、毎日、熱心に世話をするようになりました。
- ・授業時動物が不在でしたが、子どもたちの反応をみて、飼育を再開しました。

(2)市の教員研修で、4年モデル授業参観後の教員感想

①児童とのやりとりを見てとても勉強になった。自校でも、2年生がチャボとの触れ合いを行っているが、今日の授業を参考に豊かな人間性につながる愛情ある飼育を活用していきたい。

②授業から飼育の大事さを改めて学んだ。自分がよければ・という子どもも目立つが、小さな動物のことを考えて育てる、どうしてあげることが良いかを想像して実践

*1 中川美穂子。(2012)。小学校での動物飼育体験のあり方から見た作文の分析、白梅学園大学大学院子ども学研究科2011年度修士論文。

*2 日置光久。(2004)。講評、動物飼育と教育、1、全国学校飼育動物研究会、53-55。

*3 日置光久。(2007)。言葉の充実と体験の充実、シリーズ日本理科教育I「理科で何を教えるか」、東洋館出版、28-73。

*4 中川美穂子(2010)。生物教育の基礎となる園学校での動物飼育のあり方、白梅学園大学院論叢、創刊号、31-35。

する動物飼育は有効だと思った。様々な感情が育つ動物とのふれあいを考えていきたい。

③4年生の授業で、動物の気持ちを考えて接することの大切さを、とても分かりやすく穏やかに話をし、動物はとてもデリケートで、動物のお母さんは赤ちゃんを守り、動物のオスはメスを守りながら、必死に生きているということを写真によって、子どもたちに納得させ、だからこそ、動物がこわがらないように静かに接したり、こちらが穏やかな気持ちで接するようにしたり、「大事だよ」という気持ちを込めて、なでたりすることが大切なのだということが勉強になった。ぜひ、継続飼育ができるような環境を整えていきたい。

④児童が動物についての話を聞き、実際に動物に触れ合える場を見られたのがとても良かった。そして「人間と同じように相手の気持ちになって」という言葉が心に残った。本校では、毎年1、2年生が平日うさぎ、チャボの世話をしているが、飼育当番のスタート時にもっとていねいに、扱い方や動物の気持ちになって接するという事を教える事が大事だった。今の子ども達に相手の気持ちを思いやりを学ばせるという、とてもいい生きた教材を生かしていきたい。

(全国学校飼育動物研究会事務局長)



保護者と一緒にふれあい授業